

ポセイドン

2006(平成18)年5月27日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督=ウォルフガング・ペーターゼン/出演=カート・ラッセル/エミー・ロッサム/ジョシュ・ルーカス/リチャード・ドレイファス/マイク・ボーゲル/ジャシンダ・バレット/ジミー・ベネット/アンドレ・ブラウワー/ケビン・ディロン/フレディー・ロドリゲス/ミア・マエストロ(ワーナー・ブラザーズ映画配給/2006年アメリカ映画/98分)

……なぜか『日本沈没』(73年)のリメイクと時を同じくして、あのパニック映画の名作『ポセイドン・アドベンチャー』(72年)が登場人物を一新して再登場! 日本沈没は338.54日だが、「ポセイドン号」の沈没は数時間……? ところが、こんな大作ながら上映時間を98分に抑えた(?)ため、10名の老若男女の脱出劇のスピードは目の回るような忙しさ。ついていくのにアップアップで、やっと脱出できたと思った途端、どっと疲れが……。注目は、CGの粋を集めた冒頭の2分半だが、前作や『タイタニック』(97年)と比較して、あなたの採点は……?

注目は冒頭の2分半!

今年の夏、公開される『日本沈没』は1973年に公開されて大ヒットした『日本沈没』のリメイク版だが、その売りの1つが、CGやVFX技術を駆使して日本列島を襲う噴火や津波の惨状をリアルに映し出したこと。それと同じように1972年に公開されて大ヒットし、以降、『タワーリング・インフェルノ』(74年)、『大地震』(74年)、『エアポート75』(74年)などの「パニック映画」のモデルとなった『ポセイドン・アドベンチャー』のリメイク版である本作の売りの1つは、CG技術。

私はこの映画の予告編を10回近く観たが、それは「ポセイドン号」の超豪華な吹き抜けのダンスホールにおけるニューイヤーパーティーのシーンと、高さ45m

というローグ・ウェーブ（巨大波）による「ポセイドン号」転覆のシーン。これは上映開始後、早い段階で登場するが、まず注目すべきは本編の冒頭の2分半。これは豪華客船「ポセイドン号」の全容を観客に示すものだが、1人甲板をジョギングしている男を除いては、船の全容もその一部分も、そして海も波もすべてCGでつくられているとのこと。

驚くべきことは、この冒頭の2分半のワンカットによるCG映像をつくりだすために、1年間をかけたとのこと。まずはこの冒頭の2分半に注目だが、私に言わせれば、所詮CGはCG……？

ウォルフガング・ペーターゼン監督も『U・ボート』に原点回帰を……

『U・ボート』(81年)は私の大好きな映画だが、これでアカデミー賞監督賞と脚色賞にノミネートされたのが、ドイツ人であるウォルフガング・ペーターゼン監督。この映画は潜水艦モノの最高傑作だと私は確信している。ところが、彼は近時、CGをふんだんに使った『パーフェクト ストーム』(00年)や『トロイ』(04年)を大ヒットさせており、この『ポセイドン』もその延長にあるもの。これは、中国の張藝謀監督がCGをふんだんに使った『HERO (英雄)』(02年)や『LOVERS (十面埋伏)』(04年)に走り、陳凱歌監督が『PROMISE』(05年)に走ったのと同じようなもので、名監督といえども、CGを使った映像の美しさの魅力にはどうしても負けてしまうのかも……？

しかし私は、張藝謀監督が『単騎、千里を走る。』(05年)で『初恋のきた道』(00年)の原点に戻ったように(?)、ウォルフガング・ペーターゼン監督にも『U・ボート』の原点に回帰してもらいたいと考えている。なぜなら、人間ドラマを描くのにCG技術はそれほど大切なものとは思えないから……。

この映画のポイントは？

この映画は、98分のうち約95分が転覆した「ポセイドン号」からの脱出劇を描くもの。転覆した船は上下逆さまになることは頭では理解できるが、現実にもその姿をイメージすることは到底できないもの。そのうえ一般乗客にとっては、船の通路や階段は頭の中に入っている、避難路や給排気のためのさまざまな設備な

どは全く知らないから、一体どの「道」をどのように進めば、転覆した船の最上階(?)のスクリー口にたどり着くことができるのか、そんなことがわかるはずがない。

したがって、この映画全編を通じた興味のポイントは、10人の脱出者たちが、いかなる状況の下で、いかに決断し、いかに行動するのか、そして結果として、誰が生き残り、誰が落ちこぼれるのか、というサバイバルレースの有り様になる。したがって、その点についての評論はほとんど無用で、あなたの目で観ていただく他ないだろう……。

10人の登場人物たち、素描……?

そうは言っても、脱出劇を楽しむ(?)ためには、どんな人物がそれにチャレンジするのかという最低限の情報だけは必要……。

前作の『ポセイドン・アドベンチャー』では、リーダーとなったのは牧師。彼の力強いリーダーシップの下に、新婚旅行中の刑事夫婦、孫に会うために船に乗った老夫婦、自動車会社の副社長一家らがそれに従ったが、その途中でさまざまな興味ある人間模様が……。

今回も、脱出劇の中で展開される人間模様は興味深いが、登場人物は一新されているので、その素描だけしておこう。ちなみに、この映画では、最初にこれらの人物が一通り紹介された(?)直後に、タイミングよくポセイドン号は転覆することに……。

まず第1は、プロのギャンブラーであるディラン・ジョーンズ(ジョシュ・ルーカー)と、元ニューヨーク市長で元消防士でもあったロバート・ラムジー(カート・ラッセル)。第2は、ロバートの娘のジェニファー・ラムジー(エミー・ロッサム)とその婚約者クリスチャン(マイク・ボーゲル)。第3は、自殺志願の初老の男、リチャード・ネルソン(リチャード・ドレイファス)。第4は、シングルマザーのマギー・ジェイムズ(ジャシнда・バレット)とその息子、コナー・ジェイムズ(ジミー・ベネット)。第5は、密航者の女性エレナ(ミア・マエストロ)と、その密航に手を貸したウェイターのマルコ・バレンティン(フレディー・ロドリゲス)。第6は、嫌われ者の酔っぱらいのラッキー・ラリー(ケ

ビン・ディロン)。以上10名の老若男女たちのうち、誰が最後まで生き残ることができるのだろうか……？

なぜ98分に凝縮……？

映画は標準モノで約2時間だが、大作になると2時間半～3時間のものもザラで、前作も117分。ところが、前作以上にCGや大規模セットをふんだんに使った新作は、大作には珍しく何と98分という短いもの。

パンフレットによれば、ウォルフガング・ペーターゼン監督は「いつも短い映画を作ろうと思ってきた。今回はとくに『緊急性』や『危機感』を描く作品なんだ」と語ったうえ、「これだけ大きな船の場合、沈没までの時間を推測すると長くて2時間。だから、これ以上長い上映時間にすると、ドラマのペースが効果的ではなくなる」ため、短くしたとのこと。したがって(?)、それぞれの局面における各自の決断は素早いうえ、10人の行動もテキパキとしている。そのため、それぞれのシーンでの緊張感はかなりのものであるが、90分以上それが続くから、観ている方はかなりしんどいもの。そのため、脱出劇が終わった途端、急に疲れからグツタリと……。

私としては、こんなにスピーディーに展開させていく必要はないのでは、とつい思ってしまったが……。

バクチでも脱出でも勝負カンが大切！

前作では脱出劇のリーダー役は1人の牧師だったが、新作では脱出の道を探し出すリーダー役となるのは、プロのギャンブラーであるディラン。つまり、バクチでも脱出でも、大切なのは勝負カンだということ……。ディランは一匹狼のギャンブラーだから、マイケル・ブラッドフォード船長(アンドレ・ブラウワー)が「救助が来るまでじっと待て」と乗客に指示するのを無視して、自分のカンだけを信じ、自分1人で上部へ脱出しようと決意した。したがって、そんなディランにとって自分の後についてくる者がいることは、ある意味で足手まといになることだったが……。

アメリカ人の理想像がロバート……？

ディランとともに、事実上、脱出劇の牽引役となるのがロバート。元ニューヨーク市長で元消防士というのは、明らかに9・11テロを意識したキャラの設定。そして、その肩書き以上に、ロバートが娘とその婚約者、さらにそのあとに続く人たちのために尽くす自己献身的な姿は、いかにもアメリカ人の理想像……？ その自己犠牲の姿が脱出劇のクライマックスシーンで登場する。ホントにこんな理想的な男がいるのかどうか知らないが、彼の行動ぶりに大いに注目したいもの。

女性陣も大活躍だが……？

前作では、老夫婦の太った妻が「私だって元は水泳選手だったのよ」と笑いながら、大いにその潜水の腕を発揮して献身的な役割を果たすシーンが印象的だったが、新作では女性陣は若い美人ばかり。そして、ポセイドン号がローグ・ウェーブに襲われて転覆したのは、カウントダウンパーティーの席だったから、彼女たちはみんな美しいドレスで着飾っていた。したがって、その状態のまま、決死の脱出劇への移行は厳しいものがあつた。

しかし映画を観ている限り、彼女たちはおおむねしっかりしたもので、水泳（潜水）能力や、水中で目を開ける能力も十分……。もともと、ヒラヒラしたドレスのスカートは、やはり脱出劇には不向きで、1人だけはそれが引っかけたことによって……？

元市長の娘は、あの歌姫……？

ロバートの娘ジェニファーを演ずるのは、『オペラ座の怪人』（04年）で歌姫クリスティーヌ役を演じ、天使の歌声を聴かせてくれたエミー・ロッサム。パニック映画における脱出劇の演技では、あの歌姫のすばらしい歌の技術は何の役にも立たず、ただひたすら水と格闘しながら、わずかの希望に向けて必死に前進するのみ……。

パンフレットを読むと、『『デイ・アフター・トゥモロー』（04年）と本作で、パニック映画は、もう十分』、そして「今度、名作のリメイクに挑戦するなら、

『マイ・フェア・レディ』(64年)を現代風にやってみたい」とのことだから、ミュージカル映画の大好きな私としては是非これを実現してほしいもの。まさに彼女が言うように、「オードリー・ヘップバーンの歌は吹き替えだったけれど、私なら自分で歌えるもの!」。

自殺志願の男は生き残るのか……？

一瞬のパニックは、人間の人生に大きな変化をもたらすもの。ポセイドン号の約4000名の乗客と乗組員の多くが、一瞬の転覆劇の中で尊い命を失ってしまったが、自殺志願の男リチャードがその中で生き残ったのは、何とも皮肉。そしてさらなる皮肉は、その大事故発生の瞬間、リチャードはディランの後について脱出しようと決意し、生きることへの執念を示したこと。なぜそんなに一瞬にして気持が切り替わったのだろうか？ そして結局、彼は生き残ることができたのだろうか？ それにも注目してみよう。

その他人生いろいろ……？

この映画は98分という凝縮された時間の中に、ポセイドン号の転覆事故の有り様、そしてそれによって発生する実にさまざまな人生模様が盛り込まれている。その一部は紹介したが、脱出劇に参加した10名のそれを見ても、まさに人生いろいろ……。

船長の指示に従ってパーティールームに残り、救助を待っていたたぐさの人たちの運命は結果的に悲劇的なものになったが、その人たちについてもそれぞれの人生模様があったはず。

ポセイドン号の豪華さや、CG技術の美しさばかりに目を向けるのではなく、この映画から約4000名の人たちの人生模様を考えてみたいものだ。

2006(平成18)年6月7日記